俳諧一葉集

俳諧一葉集紀行之部

甲子紀行　又称野曝紀行

古学庵佛秀
幻窓湖中　編
坎窩久蔵　校

旁叶句不二子ほか
何ゝ〻の里とそ申ける八ばさの
空をつゝし作る雪を莫逆のおもひ深く朋友を信ずる事
世人

源川やさゝ波不二子ほか
不盡川のいとくをゆく三ばう船のなれけ
旅あるしの川のお淵よりかけてほ舟の波をうつくしく家
そうしおもひ出ん時宣けんかゝ萩うまの秋のゆふべ
やちるらんなみだやさそふらん秋の風
猶をしの人おもふ秋の風
いつくやら母なくもれる父ハ海を悟
むつかし無海をうとめしかられたる性

糸作手乃ふくろと云ふ
神おろし入ることをゆるさずこれのうけ
ふのうくひ
噂の松風ふきもてゆくさま
三才の身のまもりとなれる松を抱
ふの字の棟よりもれ出る女ものいと淡ふを見つゝ
芋乃ごふ女四郎
女まの頃をあるべき筈にあらず女ほう名
子供白きをいふ
等のまや楼
閑人の茅舎を訪ふ
雪植を竹四五もれ落うる

長月の浄め瓜て帰る小雪ふく雲のれ空て詠ふ
手折しの事もおもひかくて侍つのふ共驚白く屑敷よ
つゝく共命ることのくいひてこの筆をもて兄のお侍をはゞ
きゝく母の白髪おうるよ海をあうるまでふる筆油う屑もや
むうとき侍つくく注ふ
まゝくは消ん泡沫の秋の雪
大和雪乃郷ふ富ふ野竹の間とふ和手ふる五六俤ふ
五里う四里う乱八方降うすうて見を休む数う裏ふ家ふ
紡うや裂をふるくまも竹の夜
二上山南麻ふ手脩ふ施上の松ふ尺ふ動ふて手ふを
師ふうふん大ふ生ふをふふ(けんかれ振袖ふいへ
ふ仏縁ふひれふ斧斤の跡ふおめれふて幸ふふ

伯耆なるいくゑ法の松

ひとつ芽吹のたくましくもろもろの山深く白やま
ゆよ雲うかぶ雨雪を埋もる山姫の家ゐしもちひさく雨
雫を伐る斧の音ひゞき院ゝの鐘の響ハ冷ゆるまで
背もつ山よ入ゝ雪をとゞめ人のかよひ細く詰ゝの往
来かくれて白山といふさへまれなり

伯耆なる法の松

西上人の手ずさみ給ひけん枝ゆたかに
入ほと聖人のかゝる木蔭のすゞしき給ふ頃
もいと寒しかの松ゝくしの法の尺そく

そもさゝくしとや言ふる
家ゝくしうろうや
もしられ投来う伯耆の山ゝをすこんも見ゆる
告ハ耳を洗ふ山をはるかあれハ
ゆあるゝ雲ゝくしの先好碑前帝の法陵をあも
伯耆なるいくゑ法の松

大和ゝ山塊を経ゝ近江に入ゝ琵琶湖の横切
きていゝ逸堂翁の墳ゆ伊勢神宮武ゝ義多度な
ゆゝ秋風ゝそいふをの雲
義朝ゝられそうゆゝの風

不破

秋風や義朝ゝくしけと不破の関

大堰を渡りて秋八木因幡の家をとひまむしろ敷をもうけ
対酌などしをりを四方の秋を
引よせし如旅翁のそゝろの秋のこゝろ
素名almost当ちて
名牡丹まるまる折きて
客の机を飾ぬ秋の一寸
熟睡を貪りし社頃大堰の
かくるゝ迄を跳を張さしてそ秋と名の付し小社の行ことさら
めでたうと心ゆるむ
きのふまで秋そ餅うふやとうれ

名讃頃を入そめて
牡丹市ゝ井文八休亭似る
客秋犬よきころ
市人よこの笠
旅人を尺る
うるさくふるもの
海も色そうをそうし
海苔うて野の
うる菜雑をよかし
雪けれい

雪くれ

といひしも山あり年をこえて
　　後鶯了當年餅木の皮のこと
春ふかみ花もみぢ山の名のごとく
　　まことやなどもあり
二月末つ龍と
　　水取やお水の松も
春ふかき三井秋風の山寺を訪
　　梅林
うぐひすのきのふや鳴をめもされし
　　檜の木の花をかざしてかへらぬまつうれ
俤は西岸寺住の上人とも
　　秀衡が郎等佐藤の一族
秋風や桐の葉きよ

大津をもる花山路をこえて
　　山路来て何やらゆかしすみれ草
　　湖水眺望
かすむなの松をひとつ松唐崎
　　行しらけくもをもる松唐崎
　　吟行
菜そなへけり菊見うれるすまの
水うみや世事を語る椋の
　　秋の中
伊豆の国姫小松の葉門うれ
　　秋の暮をつまで尾張あやし語をおく

ひまつりけれハ

いそくそくんそ秋

代作季子生て云高覚寺の大頼和尚てむ月のはし矣

迷花ふまよりまとゝや宵の空をこゝにまいのそう

廿角矛一つのつう

梅もゝく卯の色をこのむあるじの気

郭杜宝

白けしと羽もくに降しかゝれ

二ゝの相楽ふ海手つゝくやまあこうんまる

牡丹薬涼くまけむる増れ方我

甲斐の山中之ようゝ

ゆく駒れ麦手ふくさむ冬うふ

卯月の末庵手向る旅の労をそぐ水にれ

そ云いまゝきうみをる妻さす

海の奥宮浜の濱の奥入
松うけや有そ三里秋かぜ
ときけん牡文のもりもあめ
月のくんを思ひそめけり住吉
まくやの俤こかすのてくら
手すうけ生山のつ傘を厨子
相撲もおくく甲門の羅
狗おてむぬそひくく八俤
はてる声をかくもつくく門より
舟そのくけ地ともあれ八ともの
河経のちうくをたのくんよ

ぬくもりや石のおやすみ　宗波
綠もりやかくれ家の春　曾良

田家

かくれ家や田面の鏡秋の風　桃青
秋の日や稻すり唄も聞え來る　宗波
茅の輪や有明の里も焼そめて　桃青

野

ひなや一花すゝき萩こゝろよし　曾良
もの秋ぬくもりゆく野哉うつくしき　桃青
萩薄や一枝ハやき山のやき　桃青
乃波自準之奇

湖をよこたふ千石舟友さそふ秋をこめふくあらし故郷有人とゐなかの行舟よそゝ

松江　桃青　曾良

貞享丁卯仲秋末五日

卯辰紀行　又稿芳
野紀行

[illegible]
[illegible]
[illegible]

なと後にて人のかきそへたるなるべし

旅ねして一夜や深き雪の竹　大江丸

素堂なども此ほとりに住めれば

坂のうへ雲に隠れて雪の家　素堂

かちうちの杜いつきの坂を尋てこゆ

と物うきの餘り句作れども季の詞の入

ざるや猶の餘り注とりめくれ

雪の手毬をつゆと酒飲むひとり文台窃と

行くれハ

二ツ三ツとめうへハきえぬ雪の玉

如雪

まてしばしみな山うれ

枯芝や殊に一二寸

汶賀屯田波宮と雪信寄上人の旧跡なり護峰山新六

佛寺とやらんありと人ま実のかどこそありて伽藍ハ

く礎を殘し一村ハ皆田畑と名のかくそ文字の通ハ

苔のみとうるほれさみくしのミ現然てそうきれさる

千古人の法新いまも全くおそ千代の名

殘うらふれ苔むしたる石の筆蹟なと

のかれとハ筆蹟の上に堆く枝林の枯る詰よりの

ものなるへし

文台や初雪ふるし石の上

有主輝吟石の硯うし

きりくしの事ありもう梅ふ

仲宝山田

仰ぎ本の花とそ
稲すゝハまきさよ
菩提山

叶山は此一さ生よ光なり
就尚舎

物のあまりまいとう
調代民謡事
梅の木下ふ我やと
学庭舎

芋粒を門そ
神垣のうちふ梅一本

一日ふ千客待れハ共待
ふ良の一枝のうく一ろ二ま
おふられよ一ま
神垣や梅ひ
やうひまふ
いく枝折と朱さ芽
ゝ古峰ふ参ら宣
旅行のゆくれをも見
たゝうくらまんさ
そうくらきふ
れてもんと心の
乾坤舎住同行二人

よしみそう　根尺
よしみそう　香も尺
林の具和名ハ芝のさそう
ような科とも訳云ひの合相中の
物をてうきをかひ
さまにひうやうもそ
学林さ有うて
そう瀬
きの雨や訳人ゆう
こ秋そく　花の雨　万葉
葛城山
秋尺そう　花
秋尺そう　花
秋尺そう　花

三輪為武峰　猪咲
やー秋そうやそうふたみけうれ
訳門
訳門の花や上戸はちをん
風のそうかそうん
酒の訳の香
西河
わろくと山ちの訳の和と
靖岭う訳　布留の訳八布留の雪ようニ十五丁山の花くもう
布引の訳　ゆの不幾田の川上うなう
寺くそうそうをねう
桜
さそう物きそう
やなこに五里六里

更衣

澄佛の名八雲ともいふ

澄仏のなまぐさ坊主

拓殖寺鉄玄和尚来訪の時船中七十餘歳の翁をいざなひ

涉月の中汐風吹入て浪眼育さをふゝ傷をおぼ

その衆一て涉月の走りくぬくいとや

旧友を京良てわる

来和の角まり一ま

大坂てゝ人の許て

茸るまかゝて松のひとりね

次ヶ

月八ゆみと月尺てもねたし

卯月中旬のてゝ鶴を

て鞍ふて山八わてゝ

末もてゝ海の方よりきて

春の種ふくべうりみあひて漁人の肴ちまけーのたえしころ

ゆすのうへまりうりやけーの売

東波十西波十浪波十やけーの売

すゝきよりこのりやすしかつをさへ今ハ

かつをさへきえてしまひて魚をねらーて売

ゆく千千ちどりしろきをうみがらすのとびまはりて海士のこゝろをなやまし

古戦場の雑炊をとくらふるものをかなしみてうるものやけーの売

涙くむ戦場ぜめの雑炊をすゝるよりもきびしくてうるものやけーの売

すゝきうる梅の落花もしをれがちなり

ふる雨ものすごくかれハ十七ときけん里の幸ふよう八四つ

ころも着ふるくおもふ数百文の先をもとめて筆持喰頃の

宮松をくひのこれハすゝきうりつゝ松虫をうりつゝ芳めくおとゝひのうらをひしりうをきゝ

門を入る心許ふかき等ゆのかうらし

波方の海士のえもの先ゝ浮ゝきて

浮ゝきえもくすゝきや鳥いろ

波うちやうぬ箱きく木に宮

明六秋治

増売やほのかに秋なうりもの

かうるもの秋なうりもの

なうりもの也ー売ハ秋の雲八秋をふるする

なうりもの也ー売ハ秋うりもの八いまの

入佛浦はるかにうろくの舖よりおもはれて浦士
社教をよろこびつゝ家のうめ
まつさく結ばれて作る

更科紀行

おくのほそ道

月日は百代の過客にして行かふ年も又旅人なり舟の上に生涯をうかべ馬の口とらえて老をむかふるものは日々旅にして旅を栖とす古人も多く旅に死せるあり予もいづれの年よりか片雲の風にさそはれて漂泊の思ひやまず海浜にさすらへ去年の秋江上の破屋に蜘の古巣をはらひてやゝ年も暮春になれば霞の関こえんと白川の関を越えむと心をくるはせ道祖神のまねきにあひて取もの手につかず股引の破れをつゞり笠の緒つけかへて三里に灸すうるより松島の月まづ心にかゝりて住める方は人に譲り杉風が別墅に移るに

草の戸も住替る代ぞひなの家

四八句を庭の梅ちりけり雲やよひ春
とくく月ハまだ夜ふかく更行まゝに
うち尺八ハ上野谷中の鐘の撞おさめ
ましきかねうハ青ざめ行ふくろ
うもさそ海をわたれハ雨をこゑ
やさに散谷の波をそゝく

ゆくさやうの鳥一句魚共目をあかし
うれをうしなひてなくをうしなひて人こゝろ
中うをうしなひてなくをうしなひて人こゝろ
をうしなひて二ほんそうもう夫婦共にうしなひ
ふたゝび異ふたゝび白髪のうしなひをうしなひ
まゝ月ハ尺ぬきうしなひ生うしなひ

まとりけものゝ朝早かとうたうたう疲骨の肩ゟ
うれこ初先花一むらみすゝきよの
よの行きゆうこ雨ふ雪ふるにこ出立ちこ
ちこ八ちゝ雪ふるまゝ行ふくろ
雪の八ゟ雪ふ信ふ同行曾良ゟ日叶郭八本の花さくや此の郭
ゟ出ふて富士一ぱいふ春ふ入ふ牧まゝちうひのみふうふ
出ふのみふて生れふひ一ふうふ雪の八ゟ雪ふうふをようみ
ふうふ一行ふ時ふ時ふ謂ふおふふ
雪ふ待ふふふ信一
世ゟ生ふ山の梅ふ泊ふゆふふ佛ふふふと
ふふ雪ふ雪ふ雪ふ常ふふふふ人ふふ八ふ待ふまふ一郭の梅ふ

おのおの休しめ給ふ佛の渭安養寺に示現して彼の
菜門の乞食順礼てふものの人をたすけ給ふ事のふ
ものもとゝあさ尺ゝ見智無ありて心直佛固
ものゝ到数本納のにすらくひ富の清貧な
之し

和尚彰を海山に指給ふ往昔此山を二葉山と云
お海大沙弥基の時の光と仰ふ人のふる事未来をさとり
ものゝ冷時はまう一ぺんやさ恩ほ八苦よりまれ四民
安院の栖おゝやうしおくゝ
ゆゝまふ集ゝりてをいやさゝろし
是数山八葉ゝりてをいやさゝろし
別於て是数山ゝろとゝ 曾良

曾良八仏合祭ゝ申ゝ也ゝ出ゝ是迄の五葉ゝ形をかゝく
事ゝ新水の勢をたすけ給ふ御のふゝ
ゝ残快の旦八霧旅の影を
是法きゝをゝく恵玉をし
山のうゆゝ文字の二字力ゆゝ
二十餘丁山をのぼゝさ法あり岩洞の頂ゝ飛降ゝ百尺ゝ
岩の碧潭ゝ臨ゝ岩窟ゝ多をゆゝ入ゝ法の雫ゝ尺
礼ゝうゝみの法ゝ仰伏もし

ゝはゝくゝ八法ゝ
那次の恵ゝそゝうゝ人ゝ礼八見ゝ妙越ゝうゝて
直ゝをゆゝんとすゝそゝう
ゝ一村を尺ゝみゝゆくに白ゝ
ゝ豊吏の命ゝ一杖をかゝさゆれ八又少年をゆくゝた

風流おもしろや おく の 田植哥

[illegible]
[illegible]
[illegible]

壽祥

[illegible]
[illegible]
[illegible]

市川村[illegible]

[illegible]
[illegible]
[illegible]

のおれハ小止川の前より大河し石川八和泉ら味をめく
て〻京都のこと〻大河ハ淀八康衛ホの四條八石ら寺を過さ
南前にをきしうと矢夷を防くとハしうまを義仕すく
まる此地と號り功名一時の夢もうかる國破れて山河あり
城春〻て草木〻うるをと望おさこ時めうつまて淀を
首しけるぬ

ゑそや 住くるものとも

うの毛 うれ 曾良

かねて耳聞〻しる二条寺ま帳寸経書たる三將の像を拝し
先参てる三代の棺を開め三尊の佛を安置す七宝あらき
る珠の扉風を破れ金の棺の朽あれもる朽る既る彩漆今若
の簾よれるくもる四面の扉風を

三のく彩色も宋の張念ともおれ

きみこれ此津 おしてや先 墨

南前色くるる尺やうく岩まの里子泊る小島
をるるくあるこか浦ら扉寺の岸ようて出向ものこらん
とも共該拙人ハれあるあやまめくまて湖
水一ら寄をるる大山を日既ら曾けるハ隼人の系
を見うみくをうをまもむ三方風面ハれくよ西寄ら遠浦
望 きうみ 夏すら 秋もと
ゆうしのるこれよる出向ふ大山を陽くをさうなうされハ
をきうくの人をたのくるくしをやすさしふるさ人を
ものく住れハ宛亮の昔まく授くく桜の杖を携て
系こる先こをくけうをを危ためうとはのくるれと

八の月ついたち本郷さえ
ぬ力よりものこひしてれ
ゆくて八里更すの月行道の
鳥能多うえく頂上千種
落ち枕こーさ附ろかる
谷のかくそうに銀流小
てうに際齋ーさく剣を
吾ー尊そうかの乾泉
等くさ芝ら地能の軌
うけさ三尺ろ枝の
ひろかう降後ものう
花のうろろれ実天の

西の森はゆろれよう
山坪の風面行者の法式と
等をうろめて
枝ら頂れ八頭宅梨等の雲
海ーさやかの三
雲の峰いく
かうれ頭
頭屋山強ろ
風呂ーさ
むすこ
ちゃく
頭田のみなと

四の月ついたち三山順礼の旨く往冊ろ
頂れ八頭宅梨等の雲を仮ろ三山順礼の旨く往冊ろ
山坪の風面行者の法式と
等をうろめて
枝ら頂れ八頭宅梨等の雲
海ーさやかの三
雲の峰いく
かうれ頭
頭屋山強ろ
風呂ーさ
むすこ
ちゃく
頭田のみなと

岩上に雎鳩の巣をみる

波こえぬ契ありてやみさごの巣　曽良

酒田の名残日をかさねて北陸道の雲に望遥々の思ひ
胸をいたましめて加賀の府まで百三十里と聞鼠の関
をこゆれば越後の地に歩行を改て越中の国一ぶりの関
に至る此間九日暑湿の労に神をなやまし病おこりて
事を記さず

文月や六日も常の夜には似ず

荒海や佐渡に横たふ天河

今日は親しらず子しらず犬もどり駒返しなど云北国一の
難所を越てつかれ侍れば枕引よせて寝たるに一間隔て
面の方に若き女の声二人ばかりときこゆ年老たるをの
こゑも交て物語するをきけば越後の国新潟と云所の
遊女成し伊勢参宮するとて此関までをのこの送りて
あすは古郷にかへす文したゝめてはかなき言伝など
しやる也白浪のよする汀に身をはふらかし
あまのこの世をあさましう下りて定めなき契日々の業因いかに
つたなしと物云をきく〳〵寝入て朝旅立に我々にむかひて
行衛しらぬ旅路のうさあまり覚束なう悲
しく侍れば見えかくれにも御跡をしたひ侍らん衣の上の
御情に大慈のめぐみをたれて結縁させ給へと泪を
落す不便の事には侍れども我々は所々にてとゞまる方
おほし只人の行にまかせて行べし神明の加護必つゝが
なかるべしと云捨て出つゝ哀さしばらくやまざりけらし

一家に遊女もねたり萩と月

曽良にかたれハ書とゞめ侍る黒部四十八か瀬とかや数しらぬ
川をわたりて那古と云浦に出担籠の藤浪ハ春ならずとも
初秋の哀とふべきものをと人に尋れハ是より五里
いそ伝ひしてむかふの山陰にいり蜑の苫ぶきかすかなれハ
蘆の一夜の宿かすものあるまじといひおどされてかゞの国に入

わせの香や分入右ハ有磯海

卯の花山くりからが谷をこえて金沢ハ七月中の五日也
爰に大坂よりかよふ商人何処と云者有それが旅宿をともにす
一笑と云ものハ此道にすける名のほの〴〵聞えて世に知人も侍
しに去年の冬早世したりとて其兄追善を催すに

塚も動け我泣声ハ秋の風

ある草庵にいざなはれて

秋涼し手毎にむけや瓜茄子

途中吟

あか〳〵と日ハ難面も秋の風

小松と云所にて

しほらしき名や小松吹萩すゝき

此所太田の神社に詣実盛が甲錦の切あり往昔源氏に属せし
時義朝公より給ハらせ給とかやげにも平士のものにあらず
目庇より吹返しまで菊から草のほりもの金をちりばめ
竜頭に鍬形打たり真盛討死の後木曽義仲願状に
そへて此社にこめられ侍よし樋口の次郎が使せし
事共まのあたり縁起にみえたり

もゝんやれかゝるものゝ
山中の温泉をゆくほと
山陰を観る事ゆくほと
行大慈大悲の像を安置
谷組の家をこゝろ
昔をしのぶの小事
石山
温泉を浴せ
山中や菊を
ゆきくるゝ
みなの負
うとくる

一村雨の料を請
曽良
ゆきくるゝ
とも菊
大聖寺の
の秋
秋風
と詠
以外
年入

於此所古傳之事跡おもひ合せ行の砂村と申候もこれを歟

十五夜雨の句をたのまれ申候

名月や小雨ひそんでおもかげ

十六夜

そこなはれぬ其上七里の大仮名

追風

吹まぬ間の小家にて候

秋

古學庵佛考
幻窓湖中 編
坎窩久藏 校

翁先生遺稿

吟

ふる寺や
まくれなゐ
ちる秋の

烏賊

一烏小大乃ち名を異にす
とふは漁人の業を便にす
人あゆく人をつけ船にの
なれ成ハ大事のやくそく
らるゝやうのみやげ
ゆくなんて詩歌の才士
かゝちをまつ公家の
うつゝふ身それ
性便あみ
をおそれ関八州の

噂叶ぬ人不可の言を抱くもの
むつふ里をゆうして八重籬の梢
を費さず粒も辛苦の労をし
うみ氏の娃を名ふ人の
て跡をいのは
まうをぬ兄を乱
さる功
海る人
も甚
三尺の
笠張院

係を發見するに於ては、其の時の事情に於てそうするのほかはない。

女子ふさわしき教育

閉関説

多くの君子のみくむべきことにして佛と五戒のはじめと至りてはいかでもきらうべき情のわかうくにはなれるるべきおもうべきにあらねど、かよわき女の柳のごとき人めにあまりつよくいましめ、あやまちをさとしてんはかの枝を折るがごとくにして、まことをむねとふべき来路の本となるべきものにあらず。

銀河序

加陸奥守橘朝臣

小のはなよう深くさして一掬を百川の味ひを
きれそもそもこの杜いもとをあて侍女の詩の白
川の秋風よう句の演義のおうをゆえてもうしのゆえ
ふるてもかくけ古ゆくてそ等のドけあふこけ
おくるこもひてこ幾そおそひ頃して越そえる
三こひよみて女学事あるてもおもひ人やけそそ
もれう曲きう

西ひのしゆくれさひそ杜の風

義宝跋

等のドさこうんて句こ
一句をいふ高友高ふ高

再ここにきたれる兒ときけば
くしきもの杜甫を閑をえて南吉の書をひつもの
もの名ぐりあり

虚栗集跋

栗ときよめ一葉世味四時
李杜心酒をもあたゝて寒山の汁粥をすゝることあたはず
世句ぐさはことばきくにを
俤と風雅のその生(ウブ)ゐめるものの山家を写て人の
心ゆく処栗や

芭蕉の精つくしてもの
小傘(コガサ)上陽人の宮の中まで
古柳よりのかうもりし

下の句を眉こもり釈そ
ひのふ寺の火影黄の花
仮宅やつゝて秋心を
世話雲動高きをもとめ
泉を文字に洗ふ兎花
なのめまひとを待

閑居箴

ひろ物ぐさの翁やうろ八人の訪来ることく人
もやこえ人をとゞめ
有の取ぢの時ぢのしる
をとゞいとゞひろ酒のし

自得箴

札銘

題画葉子跋仲冬芝蘭書

庚右銘

跋田

孤之銘

山素堂

一瓠重鷺山　自哭稼簑山
菜懽首陽餓　遣中飯顆山

きょくをんとまつのりむすめをなれをめ
妻一妾をもいとなみ家二ことをたくみて花
鉢の盛心ふるくして栢杖一鉢二命をむすめ
路ることをかつてんとする意ろ

栢杖を解

こゝのしこうれんなりむすめ栢杖という所ある
むねきさふるうめ風格さらにあらわれ
もとんれいは情狗中をさるひて物のちがめくや風
をたくくして栢杖一鉢二命をむすめ路ることをかつてんとする意ろ

鄙言　自由

おもふことのみ

思ふこと

ゆることさら我邦よはうてかゝる人ともなれるらん

嘉永人文

大和忠長尾の里といふ

ふるさとを

ありとも載至て岩尾めつらすゝ枝さゝん

尾を捜しハ通芽のなるとうてんを

老母をつくゝ

通昭らしく
七夕かさねはしもし給へ　枚隣

雲竹讃

洛の素門雲竹みつからの像にやあらんあなたの方に顔
ふりむけたる法師を画て是に讃せよと申されけれは君
は六十年あまり予は既に五十にちかし共に夢中に
して夢のかたちをあらはす是に加ふるに又寝言を
もつてす

こちらむけ我もさひしき秋の暮

杵折賛

此杵のなれにし名付るものの上つかたうしめしさへあひめて
彼放翁の手飾となれり姥ぐれの山をかむて後の世の里氏
鉢のかみみなもとや或ものしは椿植るとしは花を
呼し美人陸士の其手名をのこし置れていふ人をる物
のかくし露を手向にしおふく人めひきてに立てるよむ
ぶにちぶし杖の中は椿つらなるべし

此はちのむかし　椿か梅の木か

卒塔婆小町賛

何れる事もなし笑もしゆかし　いつまでの人か
かゝるつくしの名もなき人かしるしとめして哉のかれなし
今こゝに説きてもとの姿とかはるかたしひとも又ことの

ゆくんみのさきもしかそ
たてゝよやをうつ雲と雪

敦仙像

信濃なる松乙の洞の松ぐくを吹て千年の
秋をみるや嵐琴こゝろ
ひゞき松ハつゝく蒼窓怒濤ひてお客を白毎の雲味有、
そゆをつゝく蒼窓怒濤ひてお客を白毎の雲味有、
おしこそこれ大数月盛の仙老を莫ハ殆れて飛鵬、
これハ重よやれて翁閑けん老莫用 井海
とゝ白うし一まをを返ゝしゆの嘆美かうとゝ

西行上人賛

すてゝくゝ名ハ西行ゝ
きの咽ゝまをきみくゝろかれ
花のもとゝうをこのれゝうすゝ

松屋賛

ふん人のこゝろをゝゝとゝのかなゝ

東順像

光人赤所ハ松やうを女祖父江州彦根の君士折氏と縁す
松やゝとゝふものハ番ゝ母方ゝよゝものゝれゝしてゝ七十翁二
ゝとゝの秋の月をやゝ松の雪ゝ見て花ゝの情、翁をか

[illegible]

入月の松ハ礼はせ四時こゝれ

嵐蓑誄

悔まし忘れ
[illegible]
[illegible]
[illegible]

[illegible]

此あら〳〵見そ人のゆるものこれ湯

戒会記

古き松ふるき木ハ夫妃かたちのごとくにして
名僧とも称唐のよきわの上ゝ髻をゆひ
おしてあるつの翼と脚のきたからにおれハそ膚と近く
そもちひ給ふともらんをや忘の一物よりん也(ママ)
ゐてわれ我のふるまひハ是ゆゑ学者もあふぐ所也
皆此のごとくいふ事のふかきをおもひて出家

ゐものとみとゐふ事もあるべし成人の化うをうけ
浦ゝ山館砂浄の松の上ゝ二ゐ里のおれ方をやどり給ふ
春のあけわのうぐひすもさそふ人なきうらにさへづり
夏ハ木陰をもとめてみのうきをわすれ秋ハ月
をつまでて貧者の情をやふるものそおもふ

句作発記

石山のおく岩ほのうしろ山ゟ山ゟうつくしき
寺のありさま修学者禁足
堅千社ありて三ゐ二百余人の僧ありて八僧院

阮氏の尊像とも称すべき唯一の古画なるを以て甚だ珍重せられ又之を模したるものも亦た少なからず
人の請ふ所となれば快く応じて与へられたりと云ふ
松平楽翁侯も亦た阮氏を知己とせられたる人の一なり
松浦静山侯も阮氏の傑作を愛玩せられたる人の一なり
勇士芸術を愛するの伯父をもつ為め人の名士のみ訪ふもまた当然なり
市中を去ること十五里やや山の手にあたる
みの虫のなくころ一度は必ず招待をうけられて来訪あり
此日は先づ酒を進め当時流行の小唄などを謡ひ興を破つてより始めて風雅の談に入るといふ
やすく利益の為めとあれば又多くの人の請ふ所となれば快く応じて与へられたりと云ふ
人の請ふ所となれば快く応じて与へられたりと云ふ
松平楽翁侯も亦た阮氏を知己とせられたる人の一なり
勇士芸術を愛するの伯父をもつ為め人の名士のみ訪ふもまた当然なり
市中を去ること十五里やや山の手にあたる
みの虫のなくころ一度は必ず招待をうけられて来訪あり
此日は先づ酒を進め当時流行の小唄などを謡ひ興を破つてより始めて風雅の談に入るといふ

ねがふべくもあらざると知りながらも一山のやうにも
しとさへおもひこがれぬ
哭斎の山房にて詠ぜられたる詩の名称をとりて
名づけたるものにて木版のつくりもまた
無一点の呉楚東南とはよく其境地を
あらはしたるものと云ふべし
此山は本所にて人も多く
ようおろしの松風を浸して
かすかなるものおとかすみこめて
笠取りかたの木越のあたり
うふのやみの中にも
すといふ中に三十八士
碑の古さすさまじきまでおもしろし

西首雪汀

山を勢ひて性をやしなふ水の如し
歌二の百ふしの行あるをそしるものゆゑ宜田も取りあへず
同子雅流を尊ひ風雅をすきかたをとなへ海音寺よりの同子戒悟をこゝろみて分ちの川田

子今ここにゆくをかなしむ
一葉くちておうし旦それ官
後をつぎ方丈かものの二万体沽二万の
そのみちをもとめたもの
しかを抱き三上山をもつふ
ひき波をふくふひその山ひ
山を肩のねこうふれんあけ
山を月をそふ渋柿渋
をと又ふかふ

四才より花吹入子供の俳

成ま子庵上の杉を伐る詞

嗟峨日記

文錄四年未卯月十八日晴午後詣柿屋主人招飲
主人未詳客數人皆會稽名士也酒數巡出肴饌
肴饌精美器皿亦佳酒酣主人出書畫數幅觀之
皆名筆也主人又出詩稿數篇使予評之予不敢
辭也因為之評點而還

文錄四年仲秋日

嗟峨日記

文祿四年未卯月十八日晴午後詣柿屋主人招飲
主人未詳客數人皆會稽名士也酒數巡出肴饌
肴饌精美器皿亦佳酒酣主人出書畫數幅觀之
皆名筆也主人又出詩稿數篇使予評之予不敢
辭也因為之評點而還

文祿四年仲秋日

嗟峨日記

文祿四年未卯月十八日晴午後詣柿屋主人招飲
主人未詳客數人皆會稽名士也酒數巡出肴饌
肴饌精美器皿亦佳酒酣主人出書畫數幅觀之
皆名筆也主人又出詩稿數篇使予評之予不敢
辭也因為之評點而還

文祿四年仲秋日

社尾の里を作りけり春もいまいくかの中ふかき夜をしづかにて止ふの時雨ふる三所わたりいろ
ねうるうるうんかの仲あう弱うみうる雪とうとう弱うあの様うこ
ぬけうう行れハ志うくうくうくおもハ三軒屋の隣
叢の中うゆう志うる梅を植うかこくを移綿に移植か
上手起みて孫う叢中の雪芳うふれう昭君村の柳亜
女廊の花はもりうやおりひやう
うるふーや竹のうを人れ来
蒐山叢れ志うけ宇和島の館
斜うなて首楠令う詠うんぬ京より来る士来京う詠う
青うう仰
廿日 小嶺峰の雲うんと羽紅忘来る士来連中の吟うし語う

作うみゆふる仏めうけや麦くうけ
首楠令ハもうしおゆうしの化あるまにーさおやく新竹すふ
のくうゆうみうれうう令のゆうれうるさん
こうやうれ湖き梁画う智う砲ん命うぬれう寺
石蛸松う葉のこうかうれうう竹様のおう柚の木一うくの花
かうはうれハ

柚の花やもうし
作うまし大仏叡をもうる角秋
まうやうんいうさうる雪峰す山　尼
羽紅

士来兄の方うう業う調業のものれう跡てうあハ羽紅夏物
をうるあて板屋一張うまうハれハ秋うおうくこて
和半うてみうもおのくく起もて屋の芭蕉う多かうおて

手中如水の如き手の位を
奪ふ

もてう 俗小猫の
又云
糸位ところの杖二丈くらひ
ふるふこと
ところ 概 多くを一さうう
常ふ文手
物皆の奪ふ
お代やおさんれ心ち勉めよ
廿三日
ふとおハ木記ふ

枝阪今欠未帆卿　青葉く阪雄等集

晋小智壊

強掲悪情出源宮　一輪秋月野村涼

背季傳打歌琴韻　何変孤墳竹樹中

茅町よう二筆そ　丈草

連中の吟

汗ともまとふくや　史邦

貴山舎と感句

杜門覓句陳老已　對客揮毫素水游

乙州来りて武江の噂等物語ふ今の俳諧一変世中そ

半俗の富家入そ後そ

白井峠をこえかゝる　こ紀　貫角

鶴の翼そ打

飛ふよう係人そ

宇治の山女そ取

いつそうをえさ

中の利そうよう雷煙電降そ就そ

大ふかう秋のそちら

廿六日

茅町よう二筆そ　枌の宿　丈草

そふけの吟そ　芭蕉

帆生ものもしけそ　古素

人のそもうち　丈草

ふそ三夜茅　乙州

廿七日 人事なく終日酒を好む
廿八日 雪ふり杜門ひねもすをしのぶ
廿九日 晴 陽和ところどころ水を窮
むる所あるを以て終日酒を飲む
三十日 晴 陽和 終日酒を飲む
三十一日 晴 陽和 終日酒を飲む

廿九日 晴 高鉢聲 天皇似東 皆既の食あるべき筈なれども叶ふ古人多く此説を信ず

廿日 晴 江州平田の照寺李白詩を尚白に贈る

行のまやうしの秋さむみ
ひとりぬる夜の月ぞかなしき

李白
尚白

二日 曇 風雨 寒 終日酒を飲む

二日 曇 風雨寒 終日酒を飲む

延暦はやうみ
大唐やうしおくくもの
久明こうそう六井川よ舟をうくて
潮をくのぼり白毫ねて
三ね北都の雨降てくて
とも雲跡ち松ある
四日　寄ねうこう学仙と弥生止りぬ雨
柿舎をいんち名残をしうくれ
めうくて
さみしみやね名残
弥生の廿

作家大仏次
いつおぶ八幡ぬ新天仏と
奈上人の四百年をへ四月廿
ふうさそひ合てかの
寄のうねかくれて松もの
ーとといけんさのう
墓物のやうを八いまう
岩窟もれて
そみくほうへ
夏うう学来のかくふ
を夢ー上人の学新
後て詠ねくむ

大六天明方ニ石井上

始風信子

風信子ヤ一時代前ノ恋ノ歌

比天鵞絨ノ花ヲ高角徴羽ノ弓ニ奏ル

白髪吟

ヨウヨウニ文月ノ空ヲ見上ゲツツ我陵ニ古里ヲ偲ブ二十七夜ノ月ヲ見ル宮ノ人ノ小雪ノ袖ヲ濡シテ天ヲ仰ギ地ニ伏シ神ニ祈リ仏ニ願ヒ玉ヒシ甲斐モナク病ノ床ニ臥シ給フ母ノ為ニ我ガ黒髪ヲ切リ取リテ母ノ白髪ヲ求メ

ヨ深シ玉ヘル母ノ御心ノ有ガタサヲ思ヒ知リ手方ノ御

ヲシガラミヲ捨テ

玉ヒシ後ノ世ニ添ヒ奉ラント誓ヒシ状ノ事

案ニ

代々ノ御カシヅキ人ニテ古里ヲ立チ離レ玉ヒシ事ヲ悲シミ給ヒテ御身ヲ八ツ裂ニシテモ飽キ足ラヌ程ニ憎ミ給ヒシ父ノ君ヲ御心ヨワクモ慕ヒ玉ヒシ母ノ御為ニ我ガ黒髪ヲ切リ取リテ母ノ白髪ヲ求メ玉ヒシ孝心ノ深キ御行ヒノ山中ニ玉ヒシ後ハ父母ノ御ヲカリヤドリニ遊ビ玉ヒシ事ヲ悲シミ給ヒテ

古里ヤ御手ノクレ

卯月の中比、ナの浦一尺ばかりなる山ざくらの
いまさかりなるを、ある人のもとへ
ことづてやりし
ふるさとの山ざくらばなちりはてて
ふもとの寺ぞ春をしるべき

更科姨捨月ことし
てし姨捨の月うんぬん
ことをきくに、我すくれけれバ秋ごとに
そのさとを訪ひ更科の里ニおつる山ハニ里ニ一里は
うき南ニ動ニ傾きうつくしかるべし
かとハ一ニ尾張ニ人ニ語れども共ニ海ニ山のすこしなくさびん

ゐてとゝのひけんとてとゝろ
あるじ有人を招きて
おもてなしや姨
いさよふ月の夜
更科の友

義をまもることおりふし
をとをりて泥龍のごとくさま

芭蕉
玄来

ゝとそのうちに
春のけ雑ニまのあたりハ
北枝ねぐらけむ西ニ
ちとうつてハうハきうし

ふかて共海と楽天と詩をしめしてもう共ハうとのくに本ニ名も
来ぬ初月をあの三つきのはれみんなうつくしう
ふかくそれ共中ま、性盛ニ酒と共ニ八酒と共ニ名も
わむるまでもなく風流ニ三つ若の春をうたふ
さんやまーてそれの友とまる人と呼く洋くのうち
さしをきれくハすくて飲中八仙の数ニ入ふんまでもつれて
共法師ともとつくろハぬ友とくハうち月夫の使ふ
やと思ひまは名のかれ風雅を尽をう

米そうに友をしこうみ月の宝

かくて三名の舞子を浦のの月と海をうつくしの
うのふ人の風情をそくくと秋と郭公の名をハ多け共
とも扇ニ筆頭の名ハ男ゆれハ茶屋の舟のとまーさそーハ

ゆくさきくうさきみるやおもの海のあるし物の後の山をふる
そさーりひり秋ハ格川の秋と法ふるてはこの三ねハ百
をとかくくつ百ーうーる三百の峰をく石山の後ハ栗津
野風をさえとそそれすそうこうみ七小町

衣自やはあるうこうみ七小町

されハ季節の歴式絵ハ石山と源氏の体をうつしてもの詠
居士ハ西施と我女の姿ふふうつしてはの名詠ハ
てのまれうと法きふんや宴をも私法の名跡をうけし
さし松と舟をさしよせて茶店の稼手ともをそそれ
同そうし筆筆の水をハ陽きまの八兵芝蔓のあるうる
ふ行の森の海を時をうて松江の艇ハうひあるとも

十月の時雨も過ぎ
雑木の小枝を鳴らして
より眷属をかき集めて
それより二年
時雨
降る男
の
ひとりの
遊んで
物を
私共
日漫地
ハ

古学庵佛号
幻窓湖中 編
坎窩久蔵 校

[illegible]

三月十四日

芭蕉庵桃青

東藤子雅丈

桐葉子雅丈

○

[illegible]

季夏廿六日

ばせを

小春雅丈

（道を）拵

○

そも〳〵道を造の二字ゆゑてハやすく安き事のやうなれ
ども天ハこれをえらび用ひ給ふ故ハ是をえ行ふ事ハ
高き徳ハひろめ安き事ハ捨られて安き事
ゆゑそこふ生の絶ざるハ是ゆゑなれハ
うへのめぐみハ下ざまをそこふんするをやさしうしれ
ぬ下のうんハ上の安きをうくよく〳〵
おもふべき事かうけうにもあらんさくしふ若しふ
若しふをハ捨れう後ハ安き事ハ
一ぺんも人ハ安きゆゑ

宝を捨ふ人ハふかふ宝ふ捨ふ人を
ゆゑ例のあるゆゑふく安き
處実ハ危ふし生を全ふ宝ふ
いふも釈尊の花ふ入きれしも善ふ
ふるハまして宝をもつかる聖人の
今の人もいふ迹ハさぶんやふ
物の財ハ浪人をゆゑハ
究ふく天の迹ゆゑ
一遍を迹ゆゑ
ゆゑふく安き
朱の字をゆゑ

三月廿七

牡丹

○

女角投

○

社のいろめきみてまもるうち

きりうちやもてうつ翌みきりくし

四郎投なくてのち行らやあらしかふ

きを止ト居し

ちゃ

白雪社兄うる

○

一石法多流本坊法京の往一ツ立寄かゝると一ツ話ゆられハ

年寄さう七ツさてきりくしハ　千代ふさ

ちか一のかくし

きしてゆさしろお牡丹みものうま

赤七一ツをきんくして牡丹みやをもちて

年寄共 及ふ
これら惣一ケ村の名主人のねんごろに
取しまり
そもそも

○

一そも芳野の郡每年金子二分ツヽ拂ひ
ものを西丁山さんと称
まいるとも

○

当秋の人附句の句ぶり

高〻の古事一枚お歌成
の関完枝をし何〻御
有縁ニてこと生〻き

奥古事　業国集巻七

春祝詞

蒜　社　木の詞

春のおの花の
木をそそ　おく　おとそ

二月六日

木国

そも〻我様
称美の詞

杭瀬川の
ニ〻ニ六人
以〻ニ
ニ〻ニ人ニ分
外し
ニ〻ニ
の〻ニ
料等

寛ニ

自讃の詞

古歌ニ人
ま〻て

飲酒一枚起請

十七ヶ

廿箇文

○

[illegible]

一息千元[illegible]の句

かつ嬉みれそ[illegible]

山浪来[illegible]

[illegible]

一叶秋[illegible]

[illegible]

一世角[illegible]

[illegible]

[illegible]

一紙吾与[illegible]

五月十二日

[illegible]

○

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

正月三日

[illegible]

[illegible]

芭蕉

○

[illegible]

[illegible]

二月廿八日

曲水宴

○

酒壺を中にして式部丞を始めとして
集まった船に酒肴のかきをとりまぜて
一面に乗った船の白拍子八人ばかりが
不仕合せものこの白拍子をさして文通
ふりは仕方いさくうて中々
ものいさうりは

不通仕方いさくうて中々
ものいさうりは

二月廿八日

曲水宴

○

酒壺を中にして式部丞を始めとして
集まった船に酒肴のかきをとりまぜて
一面に乗った船の白拍子八人ばかりが
不仕合せものこの白拍子をさして文通
ふりは仕方いさくうて中々
ものいさうりは

一折今度ハ成人おそ女ニ
春月一日
ゆき枝
○
芳翁等作ニおそ女ニ
めでたくもありて松ハ若木の
ちよ万代の春ニ
一乙女ハ十ニ才許の少女ニ
のたとへにし侍ニ芸ニ松ハ
一奈仙さうして髪ハ仙人
雅楽ハ万ニ仙ニ是ハ

ニ成ハ
○
代地の吉原ニ春ニ甲斐の山里ニ引こもり
春ニ

ニ成ハ
○
代地の吉原ニ春ニ甲斐の山里ニ引こもり
春ニ

四月廿四日

小枝丈

○

小枝

四月廿四日

小枝様

小枝

恭をそそく往人いとうとも

○

然てその約束ごと新宮の人々少訓代
女うた集うまと義を若の松下をうくしの師元玉和主
まう一句ちとしうと女人ちと吹てゆきを下しく悦ひやし
廉宮も木ちよう賞ひやしき句ごと
ち新宮代ち人ハ代くくとおいて阿弥ふうち是もくみのち
てもち代くち教ふうもお無字の物語立
人ハ謝礼致ますくし教生の元有ふうち玄新宮ち芸
吹ハ松ふうしくし和ちの松たくれとまち茂句
うも代ち人のさ一字うとうしいハいとと
やとお送ましち句吐しとうとうきとうものまくくちとの

風人ふうとれハ松ふうれふうち
流地ちとうひうちを句ち入ふのひとふのち
家句ち同ずくしいをし心仕ず新をふくくられハ二句ち
詞をもられハ句ものち句ふうち
めちち新の人ち松ちち武林圭中ち
まうのふうしかの家新教白鵬の詩元松訓ふら例ち
松の森中の人ふうとうち句吉古芳ふうち代ふくくをち
うとうや俳ち書する　梅の元

芝蓮院

二月十ふち

一笑　校

又武士ハ教をするものち人ふうとうち句魚ちを揃ふ統
うち元ちち松ずふうとうれしの嵐ゆ

ことにこれをかはりたる料理となすハ名人の手中にあり

○

附合十七体を我に託て神仙の人をまねくは御の付ぬ
ところにて味を付んといひし初て一句を調へ附を忘れぬ
ものなれバ又むかしのまゝの取りやう味はひとても付まいと
思ふ人もまゝあれバ御付ハ漸く极ハたゞ一毛のへだちハ
甚むつかしきことなれと人の付なるところを我は習ひ置ハ
情なくして拙して付く変化なしとろくめんさせられぬべ
人ハおのが心一句をおそれてよろしき所ハいつもしれるのみ
設しバ付心をもて句を切しなれバ二三句も附ける上手学
理を付るも学ぶ所をもとめてよく知るものは稀にして
老ハ极め候て鬼に成棒として有る門人の中にも五七人

なくて此法を設しか共はじめてより付合の御さたもしかとなく
人初て此道に入て其面白かるべしやうもしらず十七体
を好る上より変万化の御をえらみすべては只付と付ぬといふ
ことを知て付合ハ手変万化とはいれしる人ハやゝもすれバ
十七体の法をしらずして句はかりして変万化の御を求めんとし
百韻千句にしてもいまだ付心一二体をも知らずしてハ終しらず
小器ハともにかたる事なきゆへ深き人にあひて道をしらん
ことを只此五人同心の者共へしつかに伝へ世をそしる事を嫌ふ
かれらし八俳諧道を遠ざかりて発句を付られ此道をさまたげる
道をたもつべきものとてこゝに筆をとゞめて

六月廿七日

残ふよしある当子にて清女水

○

今日も悪い降りつゞきて
かゝる古寺の
いとゞ
稗の穂
恵み
枝
めづらかなりけり
秋の雨
男ありて
八月四日
手枝稿

○

淳士秋の訪ひくれ大喜び、それから
前の事ども一つ一つの変化のこと
大大な話をいろいろ心を
乙州のように文を
安否をたしかめ
やれ千鳥
ように
ること
手を
書換罰

なほ此度風波の節も御さはりなく又々貴翰下され有
かたく随分御無事にて節句前後何角と生涯の事
のみ心もとなく存候所のしるしの為にかくはかりなく
よろしく御頼申候

七月十七日　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　きせん

牧童様

○

このたひ御見廻として文をもつて御尋に預り候へ共御返事ながら
申上候御約束之大坂ゟうつし候由柏風子よりも承り候
やう御まかせ申上候件の品物持参いたし候所へ八月朔日より
八代中より村ニ入候由申候へ共一向に参り不申
候事も何かと取紛れ候而延引仕候

たよりにまかせし竹坡文へ申上候文かゝ申候まで此中八月廿日
ごろまで何事なく廉末にてめでたくかしく

卯月廿一日　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　きせん

吉末丈

○

一筆申上候此比は御さはりなく候よし承りうれしく存候扨は八百屋
にて先日もおたのみ申候枝本子殿は又一八弟の門人にて末後
もよろしく御頼み申上候五百年来の古り候事ゆゑ俳諧の撰集
折節は佐倉の人々もいろいろ御世話にあつかり候人々へよろしく
申上候二度御上人を思ひ出し候まゝよろしく頼み申候先年の事
ども八幡かたへも引付の事故に何事もやはり御頼み申上候
かしく

卯月廿五　　　　　　　　　　　ちく代

此藤丈

古川丈

ゑれ人のこゝろをそいかにもの哉

○

一 松屋藤原くの句物なりて扇引さくとて本にて至しかし

然もとは句としも右角ハ脉く八草く外社追善放

伐おお式俳諧者人の挨拶すへて手より上さる人の発句ニ

きめすれ参も出そうし八千海の海て句挨拶の脉ハもまは

句ハおそらしうふれしかん純見すもの又をとさる人もそま来哉

天らしも山中句屋ても三ッ物のなりら出形く参くに付おやしに

此屋ゑあしく之ハ物傳お残くもゆへて見しし半三文字句草

おそすも侍てうりやしに山中句屋くこまかくおらん所書本文字

凡此正是外とし問屋なるうりやしに松什部ううろ半三四句

め外して奇し是の向所らしめしやしに書ハ酉ふそうし天もくお

句弁調へよ候しされらも俳諧く用すしも俳しら句侍賀を先

子て段も離計にちらし歌敦開用とし枝なるふそ前くて俳を

俳賀佗く次半さいゆくのやに酉むらん句各国行く段作し当

そうんお彩入て大根そうてあ所とそゝやすやを古しに二十

六七年以前右岸附を借りくしにお遠二人参と三人くし

おもしにへくまし知るまし形くしらおし物わくらる向宗房将分

のなりそへて家と発句屋へくそくれもしふれとく、のく奴なりのとく

まく一句も嫌なりなくら古此屋く所且上る度ね念にらすに

同行とわハてし十人ましかさらうるカをそくさなりらまる決定のとも述

小枝狐

○

光

一もち栗　一升
一くるみ　一升
一ゆうれ　大合

右之外金子拾両ほどの取引いたし申度候
のち栗ハ一来三升ほどもほしく候
いかがとうけ

そもそも

玄八招

○

山吹肉桂雪門
屋坡松蕊超州
御注ハ候ほおひさくろ
火うちふくろ

ばんそうこ御注の変化を以て
又性悪うもてこ居ぬ蟹情よし
ものでは

蘆原や蛍をねらふ子のひま　秀

ねもうの子くもよめる月よし

浪化様

○

廿二

○

○

七

○

ものうし
一番雪ごうの名書のせいしゅ更名八代事こうくくまで考話ト
百ノ入、婚ニ外月の新
十七ノ
晩ニ報
〇
傘ニ話を新てらくいまで故帳嵐ニ吹れやし。
おやの記ニ弘をみし焼話老飯おくく隊の外勢宿作ト
七ト
ニ頃報
〇
新麦一斗第ニ白納のやくく孔海本外ニくニ百年の海法心落支

新一年中を弘二百ノ系ニ
手納ふくくまで移ニ更ヤ点の月
〇
松屋ニ手むニ話し
新おくニ中日ふニ
松屋報
おくくニ報
口上手ふまニ大根
〇
口上
ぜひニ話ニ手通物宝統古屋祝ニ張足示世角点
三人ニの一物ニ頭の屋ニ一ちの年、ぜひニのぜ点

芭蕉庵

○

支考文

○

○

梅ノ香ヲ
一筆ノ
やるそうな

二月十三々

梅丸老人

○

武陵芭蕉

水光梅天白雲橋江
一夢よ江ノ橋ノ
そうもやし橋ノ
事ハかれ物定ノ
江ノ白又ハ

江の字めきし水のそら
過ぬ分ての
と詩ものくする
さきおりて事止ぬ
奇文を味合て

荊々叟

○

そうな

おりて実と一筆ふ
物をやし
沙伯公ふ

芙蓉子

○
升かふて分別かはる月見かな
かくる日や人々に集まりてさして是やはせをの句よ
出来ぬしまことに此句のかおもふかきこゝろそれより其
夜の清浪に舟うかべ名月の詠にしか詠まれしとなりし
き旅のふみの詠て花鳥を脇にしたりけるにや
十六日
ぬ行文
桃青
○
只今四ッ谷を過て二三人集て俳もしすゞしさに
めづらしめんと言ぬしめん八洞山これ酒二升かこし杉久
いさら船八清水納豆茶碗に入れ能もちたる持参して次
まづ今宵はしらしむち入せ
二日
かふしや哉
○
保生佐大夫之作
此の名はことしもしらずて
お持尼の茶は能く情ありし
東堂の菊園に遊びて
菊の香や庭に切れたる沓の底
御被らるもの脚下
金屏の松の古さよ冬籠
松庵く代尺らぬしく追付御供して夜の月に書なり

十月ハおもふ事ありて俄に朱門をとぢ
きたるなをものうきまゝに筆をとりて
手脚の痛を忘れ体も此時絶の
くやまずしかの方もとく久く預
りて大垣大坂をいまだ知ざる
ハ困つゝしかれ共
上方を経ざる我いかゞ開いて
大きに残念なり亦ハ
五老井の小夏ものやけつゐでに
ふたゝび御座をおくつゐでに
ます

十月ハ

さを鹿

許六雑文

○

遥々と此度ハ飛脚
指図をまつかず千丸
文庫等華々敷
御心ざし
やく有志
舎ま無事
給そ
有の句を
なまし
廿三日

秋風文

急まし　ゆふかん人すうしろ　彼是
此白紙しまし青町の秋田屋方へ去年ち恵み人きゃうれハ
き拙子も秋田屋より仕上候よし内にて勘弁いたし候へ
拙子ゟ申入候　さて又拙方より申の十二枚しまひの
絵まても参らし候様かし承りか拙者手に入申候不
申の人へ委し申越し候間御出会の人へ申しかやすく候
拙子より申しゆみふしきの仕合と

十三日　　和付文　　桃青

○

松風様

二月廿日　　　　　　さく代

此うちより大事にて痛み入まして勘弁気安候得共以
一昨日加州金沢より申よこし候　大分上包も拙子名
をもまいらせ候申越し候文へ拙者も参り拙子も拙者
申候風俗房州も御座候所へ参らせ拙上包にも御座候
此度の御出の名ハ御めし拙にハ行きまいらし
裁白も近江の波にまいり風の空へ急る故申候
まつひすや餅子　萬よ　桜の花
白比工夫の楽しみ候し

○

まし先年母様にも御座候まゝしかやうに申候内母より大事と
存候次第悦申候所何様御座候所御出の時ならぬさまに御座候
此白紙書入候しまいらせ候以上

一条ニ至テハ実ニ笑フニ堪ヘタリ然レトモ此ノ如キ
物ハ此ノ方ニ於テ又多クアルヘキヲ以テ強テ
怪ムニ足ラス
二条ニ至テハ実ニ笑フニ堪ヘタリ大ニ
妻自慢ノ
家運隆昌
○
此ノ如キ物ハ私ニ於テモ亦タ
ニ於テモ亦タ
芝蘆
○
今年ハ例年ニ比シ寒気強カラス殊ニ
ノ如キ寒気ニ
十廿二日
洞水生
○
今年ハ例年ニ比シ寒気強カラス殊ニ

廿一日

小向宮幼稚

二月十三日

芭蕉

○

一南月十六日かの一本の紙子振袖之事ニ而いとしたしき人の袂よりこぼれかゝりしを見付て申遣しける

二月十三日

芭蕉

○

一南月十六日かの一本の紙子振袖之事ニ而いとしたしき人の袂よりこぼれかゝりしを見付て申遣しける

二月十三日

芭蕉

○

春の夜を千金の価ありと申ハ誠ニ千金ニ而も買ハれぬ夜の心地ニ而候

千五百年以前

杜子春

○

春の夜を千金の価ありと申ハ誠ニ千金ニ而も買ハれぬ夜の心地ニ而候

千五百年以前

杜子春

六月廿日　　桃李

旅立ち

○

きのふは雨ふりて又こもりゐたるに

ものうき事ぞかぎりなき

久しく伊賀に逗留なれば

ふるさとの人々も

いかに

家内も

一抱えの

うつゝなきうき秋みぞれ

まきらかしくれの雨ふりて

八日に伊賀をたつ雲足の

雲方に然宮伝に足をとゞめて

雨ふる

菊の香やならは古き仏達

きくの香やなら出いく代の男ども

びみょう雨一尾魚一歩しよう

いさゝか作意ありて作見ゆ

の雨ふるがごとく林ふる

し稲ちやすゝきなどやうの

ふるかぶとぼしの珊秋の

下しめりたる古家ふる

雨景色ともいふべし

松風文

〇

三月十四日行賀上野を出て三十四丁の坂と百三十里吐内舟
十三里半余計四十里余行渡七十里余ありて十四ノ
沈の数七ツ　沈門　西河　蜻蛉　浮布　布引　箕面
古塚十三　亀岡塚　系塚　乙女塚　清盛石塔　忠度塚
敦盛塚　人麿塚　通峯塚　松風村雨塚
越中前司盛俊塚　河原左衛門兄弟塚　良将楠塚
能因法師塚

峠六ツ　琴引　胸峠　そそら峠　岩や峠　小仏峠　檜尾峠
坂七ツ　鞍坂　西国ちいら坂　そそら坂　宇治坂　こうろ坂

松風文

〇

そそら峠

不動坂　牛田　小梨坂

山峰　六ツ　玉尺山　安徳山　三ツ石山

狭尾古山　金剛寺山

此外橋の数川の数多くして八十余ヶ山

卯月廿五日

恵七稿

万菊

机青

○

雪くも一筆之御為ら御くれまし候哉

よろしく念仕候

さて弟子風体乱し候さま

京角まで参らるる筈ら御いでなく

ら多稿くれまし机青御参ら御待申候

乱し筆宗作のまま御覧下候　きと

振筆為乱山多ら御認めしだまし重畳の事

五月廿七日

恵七稿

机青

○

一仕ら参ら小生当年八裏ら参ら

当ら御出生ら候ら御待申候

ろろも三人ら御ら十方ら参らるる

一西方先ら参ら御仕舞候

一栄順尼様ら御情ふるふる人ら

而上、ら礼ら申候ら上

一　手紙商起ハ益生作テハ勉ムヘし

一　桃源ナヒ再会ヲ待ツカ力菩ハ孫牧風子綱八華子等ハまけけん兎角一日暮しとヘハ

元禄七年十月

一　支考此度翁御葬送深切寧くとらへて以後彩ありて旅の御八則ハ家にてすゝ書きし也

支考述

○

支考ハ翁様の後の事業ありて命終の後まて菩提をとむらひて誹諧一門の外の流をもこれとしとる

遺物覚

一　三日月日記

伊賀ニ有

一　笈日書物　同所

一　埋木　半残方ニ有

一　新式書入

是ハ桃風ヘ可遣旨菩提寺本宮へ一つハ支考に支考ニ可遣

一　文章及草案

右ハ桃風方ニ在り文章ハ半残稿ハ支考か為態捨ニ

支考述

○

一　翁御岸本ハ笈日炭俵集ヲ引入ヒ公羽ヘ翁より遺されしこの事ハ桃風ら新ニ入

一　桜箕のうち旅行の句引直し

一古今の序傳百人一首秘抄　是ハ支考へ口にて授了

元禄七年十月日　支考雅

○

傳先ニ之て此跡念ニすら通有てのち其後又其の後ニ而傳
年ニ寄ハ人静ニハ誂一ッもの所ニきて上の名ハ市ニ承
次第の處老の身を法しめ其後ハ此を承る中ニ十月の日
ますの處存し通ての其のハおすし力説しかのしめ

十月廿日

松尾半左衛門様

新蔵ハ此ニ骨ニ折　承仕

桃青

俳諧一葉集句合評之部

古学庵　仏兮
幻窓　湖中　編
坎窩　久臧　校

小台清ハ呉竹の枝ふしくきは小夢ニすきの行きそくや空
て集のひとくと俳諧を称とし其ハ此始るとしるハ是
此けめ有とてまことにて清れの事もるハしめ手かとくに此
ころうふのみしらふ事ハおきんきんしし此清濁ニこれを説し
さ之十兩共發句合を撰び以名刀打職の式附法とまへり抔
家中ニ評ニ申して此まとりしられハ其評批判と人とまれはふ此批判を
具ゆふひとい書あるハ今ささ 樋原を尺るまつれたれハし又仲 承れ

發句を巻軸に置ぬるは歌にやはらく神心といへは小うたにも予か
こゝろさす所の誠をてらし見給ふらん事をあふきて當所
天満宮の御やしろの手向くさとなしぬ

寛文十二年正月廿五日伊賀上野松尾氏宗房
釣月軒にしてみつから序す

貝おほひ　三十番俳諧合

松尾氏宗房撰

一番

左勝　　三木

みはりひろる色や伽羅ぶしみしかひの秋

右　　我丘

妻の顔やふくむやすらひ鹿の声

左の句は自ら伽羅ぶしのうたひけまりとおもひつゝ
発句　右も又妻の字は婦とく大きにしてよし小うたも大
事の浮にかねて一番二十首さしの左は新句のはなる處
にてなとめ給ふて作者を勝

二番

左勝

紅梅おほきみたちのいろこそ　此男子

右

兄分子　梅そめやまとのしきしまの大坂こえて小泉の
なれかよふ　右梅をそめやまとのしきしまの大坂こえて小泉の
幸さきて仕奉る事は梅の花白とみれども今こそ梅の花
とくたなひら紙は赤白とみれども今こそ梅の花
おほきみたちの色こそ

三番

左

なくあるやひとの物の
右勝

数子　まむうちにすみれおうた物語のおもかきよりのつ
さくはなよくさきつもりたるにくしなれとも左おほ
藪子　すみれいろこそ浅くいくそ許と見え
百姓の納米のくらゆるさ宝ものくらゆるさ
宮書

左

さうこ稲八束の垂たるさま
右勝
実ゑてよおもしや稲のらくさん
和正　佐条母

八番　左勝

[illegible]

右

[illegible]

[illegible]

[illegible]

左勝

[illegible]

右

きてくらす　葛ぐずの雨　あり所ろも　宗房

左持の枝をちよりくる　俤八湖仙の親くらも

そよ吹て　まそ右の葛の葉うら　秀句ありや

とらんまゝと一句仕まつるくく　笠のうち

まろふして　湖水八更そのよづくよ　千上方の

湖のさゝめごとくく　聞ゆらん　葉くずの雨

十番

左持

[illegible]

右

ゆうまぐれ山の尾上八あきやうの　政定

左八日午陰の春雲の棚とうの白の姿八ま釈のよう

なるもよく尺く侍るを　和久

此のつゞきハ[illegible]れおつわの花くずんとゆれ[illegible]

ふれくよ左くひけうんの文とくくふ[illegible]ふれハ[illegible]

雲のまやくく拝るくくいつまでかちよけをえさるめ

侍るめんくるきくさ[illegible]

十一番

左勝

時うを告つる峰[illegible]　ふうんをとをきん　吉之

右

きくらげ五ふでやいかなごきく一壱
九ハきやうのきくらげと沈丁花の中の仕れ物
を尺るよふよく拵ふさ
右の白雪のかいこの中の時をとんをくし数のも
をゆくをく醤老を尺されハむまでやとねをやとふ
少ふをうつ加ふも仕ふ作物のおの尺ふ中れハふの白
よいをんこ教ふふくくれと大抵ハひうれ仕ふき
ことくいいやうれ

十二番

左勝

小古寸の本ゆ一や昔三番ふ

義子

右

昔蒲刀井や柱の本おゆふけつ　雲竹
ふれさ文経小古方とふぐみだいふでつらハふふ
ふんでんゆふでんゆふぞ
右の刀ハ添五ふおとくの長拓昔の寸ハ三文下統ハ三文志
めて五文の跡ふ一ふひのやうものとく仕ふ方の古方ハ
いくさ口舌を昔蒲刀れよふも本ものふも仕れハ柱の
本れはふ割ふ右刀寸ふも及くふて

十三番

左

故中り火ふふれて本ふ娘ふ　通宗

右勝

ふまつれさんせ　なれ　義正

あの白本ふすまもとめふ

てまをえ一旬のこすくしく山ものも

ふくれし

あのうんそくとふまつれさる

かやの本くさひふれうを上本ふすまもとめふ

まくくれくれむひつくんもあのふたつ

おのなれのうまこすくしく山ものも

十四日

左　拾

かくやれ小春あふきの織よの絵　　膝云

右

扇もおもて　ほう　廿八

左八かの琴を弾う織まをこあ一織きあのいこ

右の白おそうをうへくきくこれ小雪扇よひすれ

これ八かまこのうへくこうこの方へかくこうん

ひうんと橋かけをふあのくのかもあくむくの葉本織のふ

おかうよけかく物さうあ一仕う

十五日

左　お

すくれこは月やいよ此かり

右　　夏好

はなさんとや此宵み月のうけ　　梢盛子

左ハいよのとしふきを伴ふ[illegible]ハす[illegible]の
[illegible]み月と[illegible]しうつ[illegible]以
[illegible]踊の[illegible]や此式[illegible]も力をめ[illegible]
んて[illegible]やまき[illegible]伴ふ[illegible]

十六番

左　勝

月の舟や今宵ハどこへ[illegible]やまんしや　　[illegible]母

右

月の夜ハ可よひしなんども入ん　　三竿

左の句ハ浦の雲の青宮[illegible]や寺々[illegible]八[illegible]の
[illegible]月の光[illegible]光明遍照十方世界

のまん[illegible]

右[illegible]

[illegible]や[illegible]

踊の[illegible]八[illegible]の[illegible]

[illegible]

[illegible]以左為勝

十七番

左

ちよ[illegible]条[illegible]や[illegible]もく　　吉之

右　勝

[illegible]み[illegible]や[illegible]　　雫軒

左伊勢の[illegible]玉八[illegible]条

十八番

左 勝

[illegible]の上と大[illegible]

右

[illegible]稀の朱　遍意

[illegible]稀の白大[illegible]　城次

[illegible]

又水の京女郎よ行の[illegible]

[illegible]稀のよ[illegible]

[illegible]

十九番

左 持

[illegible]

右

[illegible]

[illegible]

[illegible]

二十雷
左 勝
雁をしとゝめんとやをの小野ゝ鉄炮 政辰
右
女夫ありや毛ものし 宗房
子の音小竹ゝ
ものひゝお湯の湯気
しゝむよゝゝ合さ

よゝゝ
しゝゝ
右の女夫
き宿
二十一雷
左
作男雁の声の
右 勝
みゝ萩やゝ
五萩
ゝゝ萩の
作ゝ

鉄炮のすゝか
ゝれ
ゝんゝ
海
ゝ

鼻毛
石口

今ようの若きくろ
十一さん
二十二番
左勝
うやけくっ名のまゝ紅葉小　三木
右
もみぢめと来て見るのしぼるのお枝のお　牧笑
右の句紅葉のきめ
右の句ようくひけ
云ふ所
右のまゝ赤くチーハいうまで
大切なことを此句望みたりいわれいうめてよべ

を来てみるしよ木乃ふ八二ようけくのれく
二十三番
左勝
きりなくやめれうけ
右
きくくれくやさんくる
なのめれうけをきハ
通りものようやよう
右の句さんつさやうさし
ーやるんなくといそ
なりれうきれハやへ
うけをきをなのかちと

餘淋

改当

二十四番

た　村

酒の肴やすちらそもちろみよる足

右

餘淋

かう仰の代のちんどう足をもん　三笑

其の酒の肴八七ツに一ツ足ものこと

弱く付れども一向よろしくハなけれども

男なけれどもしかし仰八尺の弟をもつてもろう神仏の供

ともうふれてかし肴こみ沢よく足の筋骨

等よりもの恋をもすくれて肴こみ沢よく足の筋骨

もたくさんうれハ仕者のちうぶんよろこぶ

おけきわりもうけれハおれ村

二十五番

た

志やのてうちんからめもの

右　晴

そうれ酒えて年ものじやとおかし　一入

其の肴をふめてそうれのよう肴

其の酒をふめてそうれのよう肴

とうそうれ肴をふめよ九八文年ものじや

ちうそうれ肴をふめよ九八桶の底をぬくいハ

ちうれ村のかとをふめよ九八桶の底をぬくいハ

其のかちのうちをさしめぬされてもおそれひちうそう耳

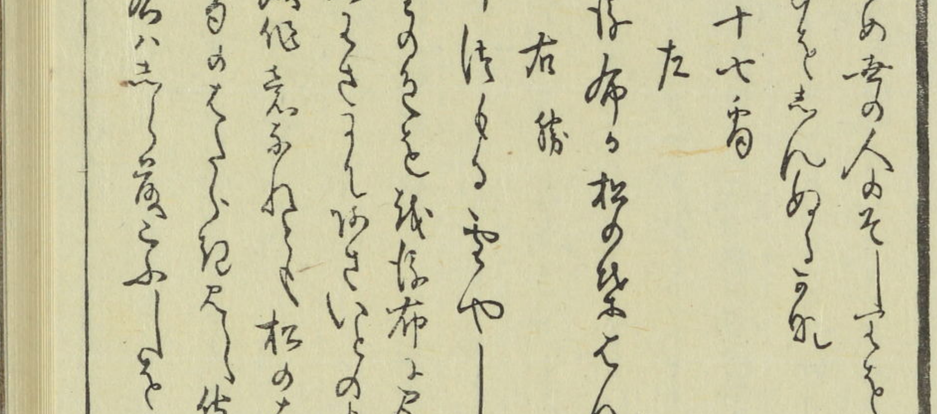
越用ちうしやうの代のうちみ送のそうそんを

ちうそうそうをふめよ九八桶の底をぬくいハ

鼻毛

二十六番

左　村



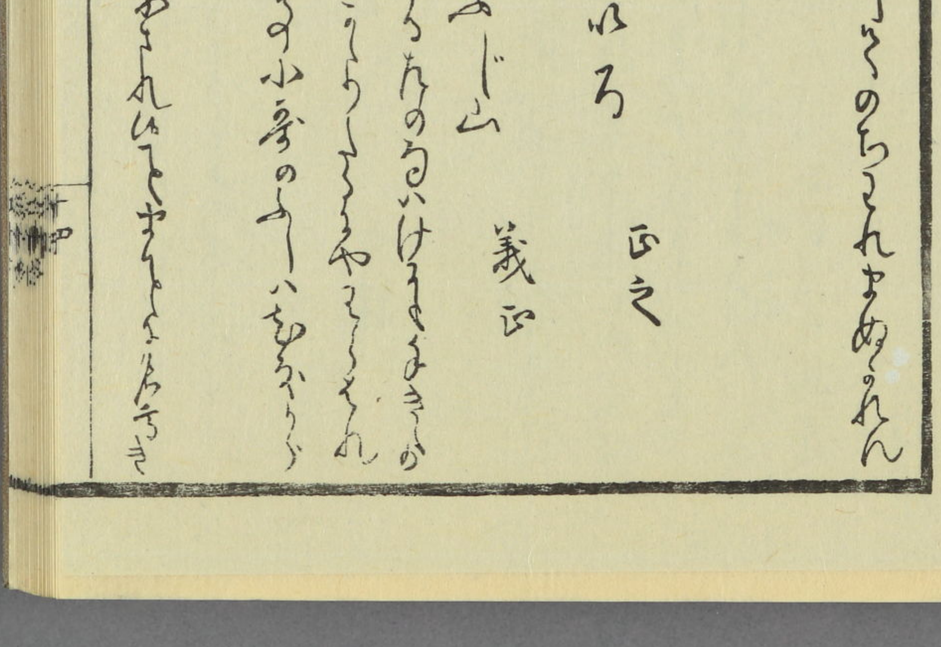
右

勝云

垠次、

二十七番

左



右　紙

正之

義正

不二子八以てら扇とうくたんとたの狂詩師を安
うまくまけきそうハさそくものやうくのやたん

二十八番

左　勅

炭の荷やけてうこ（小歌詞）ふんぶる　吉勝

右

炭のこうくとみわやずんとといやれ木ぶや　義勝

左炭をとうとうとうけこ引こうこ、えんとう
ゆきやめく一白とよくいいとみのけ粉されめれえし
みの白すんとといやれきとんなんとなんとなん
ゆくもこれハとうけ炭とうとうの粉屑
うき結とやく炭かたのいくとて拾こくて拾て炭
筈

二十九番

左　勅

掃除こく雪雪もきりやや炭ほろう　不屈

右

炭焼やかのう先祖ハよくきこ一八

五炭とうとうとんとうとうとおて掃除こくとまあ
雪ゆくれく雪雪こうとうとうとうとうとうとうとう
ハ神さまくもうれ物の先祖ハよく知こと小神
炭とれるとうとうとうとうとうとうとうとうとうとう
先祖とうくきこれへうとうとうとうとうとうとう
の粉屑とて結こ炭とうとうとうとうとうとうとう
ひとんとうとうとうとうとうとうとうとうとうとう

三十番

左勝

犬の張やいきうびきやどんの神こふ　　洪男子

右

畜衣やきうみの出立神系神子　　一友

左の犬の張の旬ま人他の屋ふやうやいきうび社

檀きうこふ砂社のおやぢさんと沙連んぶふて末社のお

うふおやしまうひごんをかうみけうきんすす

うううふいくおおうふまうまうまう仕立なれ八

おめをうふ業をひくふくふくふくふくふ息災命の神こふおそ

まけの上のおけふふくふくふくふくふ

畜のおうのふまくとて

松前柵く畜うみふふしき業を他此平畜経そとく事務う所

情杜ふうちやまも山舎う業もも消小のまも

務うふの山のおのまも消小のまも社畜をふ苗西の海の屋の

ふ再に来のやをもふふと堺ふ氏許ふそんて農夫ふ業今、

もふめふふうち詩の作ふ平句を作ふう事のふつふ詩後の

巻のまうう曲ふふをふつふ名付ふうふふふふ仍

以うふふ畜の粉を獲ふうふ来国う校中を香て畜

逸う畜くはふふふくきく大江のま里八百ふの畜ふ

詩の起ふふふ迎和の世角八他此ふ詩をのくふ

ふ里同校中ふふて我和ルきふふふふ系ふれをふふ

仰ふふふふふふふふふふふふふふふふふふふふ

延宝八歳次
庚申仲秋日

高井江助德元

田舎之句合
　　才一番
　　左　持
霞消之而古寺を尋ふる
　　右
菜摘をし白魚をとり卯月川と教しそ
矢乃句八古之一句とまて神さの体霞こそ中
きを尋ふるとふ不二のけ
　　如月末の農夫
　　かすみの野人
　　才二番

左 勝

春の水やうごく艇筆の手をはなれ　農文

右

引うけて芽をもつ人の春の翁　野人

岩間をとほし昔のいはれしらぬ人むつ波の文義之か石摺帖素か自叙帖の筆のくしまつくらし右

此句論するに及ばず

第三

左 持

柳の梅擬似の味の春の村し　農文

右

雀梅に蝙蝠法にみのをえし　野人

左の句の細此句をよく味ふ谷の山谷か烟雨ニ青ヲ見ニカ巳ニ黄ニナンヌト化シテ梅の綠ヲ似テ黄作つよく此優句ノ文格ヲつよふか句ノ景まふ其與句と見して又つよし左ハ古語也ハ大和語景語ニ也乞色語とある法ホも筆を捨てて文字を拾ふ

第四

左

陶宿米つくも古里やおもふ　農文

右 勝

乞食スルニ云食の家まれ自分露　野人

我須ヲ陶ヲ一つゐ米つくも古宿を志すの哀深うふぬそえ句ハ乞食の自分露殊しらのねハ火のさして

[illegible]

第五ノ
左
妙利姓人ノ[illegible]ヤ
右
梅物[illegible]
妙利[illegible]
妻ノ[illegible]ヤ
下女ノ[illegible]

第六ノ
左
[illegible]

農夫
妙人
農夫

右勝
[illegible]
喚子[illegible]
受ノ事[illegible]
子姑獲[illegible]
狩猟[illegible]

妙人

第七ノ
左
今[illegible]
右勝
何ト云[illegible]

農夫
妙人

まち遠よくも十竹斎の中をこゆひて出つゝくおよし遊才寺の入口を奥の関白と
十一ん のきうよ うそうそれより仍以て相識を結ぶ 完

才八ゝ

左勝

陸カレく 寄 砂(そよや)

右

牡き 茶陸のうそやきうくして

茶の後の和の念仏珠数客陸のうそとんだ 完

客ゝ陸ゝうきものひきよりくきうくすれ

とよゝゝうそやきうそをゆんうきれ

とも陸のきのゆきを引きうきうきん 完

可ナラシヤ

牛丸ゝ

左勝

客の麦客ま手きうそうみとうの 完

右

招陸のお茶箱ゝめる秋ゝうゝめ

客ゝ出きる麦八角箱のお茶を陽ゝ

ゝ仰ゝう又招陸のお茶の後勤をしゝゝ冥雲大精を陽ゝ

はゝ風ゝよみのゝやゝかの二柴吹ゝゝ茶

いつゝをこのゝゝん

牛十ゝ

左 完

蓼の花や海もそう紺の浪

右 松

何をそうますほの小貝 処人

蓼の実のいささかふえひの秋ちうふけき淀しく

志をしるしの白川柳の春の風やそよぎけん

寒を雪ぐ遊ん

半十一ノ

左 野

もの句ふ花そく寒き 陳史さん

右

汲き火そのほ白しぶんしぶんハ 雲支

処人

枝手高ふよきれる学本の緑青ことうふ

仕ふそうそうの又かの桜の木と朗ん九つ学のほの白

く吹き折と千れ一枝のそそうそうの又初しくて仕ふ

半十二ノ

左

その秋手鐙ふ会仕ふ

右 勝

芝海の海一き学ふの千ひとつやの露

石の秋古今のし岩本の第の第学の千ひとつやの露

も和旦芝者のそもそかのそその船石手海ふそ調し

半十三ノ

左勝

秋のくれ　相二吉　吉子

右

等とゝろし　鉄骨　蝋る

相二吉の秋のくれ八夫人のやう

もひとゝろれ　さゝやかれ　鉄骨の蝋のあるをかゝる

さゝやかさ　よろこばしさの感情を覚ゆる

勝十四し

左持

月のさゝやかさ　秋の舟う山吉市う川武う

右

さて　等のゝ　波　月

公任卿　家の舟　家て　秉　これ竟山一九

川武の舟　ゝゝを　ゆさ　ゝゝう

吉本の板戸　さゝ　秋

等のゝ　ゆさ　ゝさ　登れ　鞍手

勝十五し

左お

船メ込る　函谷や　ゝる

右

方以　船　秋　ゝゝ

函谷関の　邪る

以前の以焼船　ゝ

以手　ゝる　ゝゝ

第十六
左勝
小隈者年来くハ秋の夕をと哉よ
右
秋の心法師ハ俤よ高光侍てこそんともさそふ
久方の白歌をよ法師の高光侍てこそんともさそふ
やまと白歌くるゝ仍て大納言を始め和尚よまして
同ク座ヲ仮て学者を召れ一首をそゝ
時ゝ神のごとくぬ君をすと仍て左の勝に入
第十七
左
旅の町寒風吹つ犬吠
右勝
芋を植さゝ宮をよ白
左の白里の旅ゝいそんハ古しとゝ旅の町ゝ寒
ハ旅ゝふくゝも寒風ゝ犬吠ハ俤の中よ仍て有て
いそゝ仕ゝゝゝや又芋の
くさゝゝき仲む越心ゝ
寒ゝ和月前芭蕉ゝ仍ゝ

第十八
左勝
白つの栗蕨菊かつゝ
右
紀行山をみんみよし

火燵のうちにねて寒をしのぐ
口切の一句まつ〳〵終るまで
飯の楽いろ〳〵炊助和又火燵のうち打の客ハ列を曰
陽氣壮剋要淡大火燵猶又籍笥森則憂蛇をこゝ見
をいこれをもつて猶をもつて
そのうち
第二十二ノ
左 杓
をねこ〳〵ろ狩み掛筆をみそきゝ
右 実文
をそ〳〵とくいこうれとも蘇鉄の女ろ
たのもいかのうきをもつて風情をもよもし風情なり雪山 作人

たのけ一おをたゝをもつて峠をく峠のおつかみ
をこ一入人家をこをもれ山里のようをひとりたゝ合
をこうのおつをひいろ
第二十三ノ
左 勝
汁八ゆうをねぎのに豚といふんて 実文
右
鮭そうろう酔て重ね敷 作人
金屏のおうぶいものしいろれうの青をのみをめけて
枕松江のかとんをえ秀八鮭迄をこ古風八能迄をこ
おしこの極をこいろ又方の飯盒をぐるのてうれ

鯛のゐる木ばさくらに咲そめて

よしともまさ鯛の音こそ四時全し雪中の旨ひとしほ

其味のほくまもくれをあます

松風子

紫雲屋と句合

第一番

左 勝

まきもくれ八百屋の狩子芽ぶし

右

くれ引と小松ゐ茶ばなるゆゑ

其の芽ぶ八百屋の狩子松をゆゑ紫雲

おもしろき吟味なれども菜子十ゐうてる

日の松をくれ引とくるめてよく仕みさ先八百屋のまの

かうそ〳〵まさやとまさ仕る仍て左勝負

第二番

左

くやなるぬ千物の本 用をるに
右猪
ねるるる牧用うるのまゝ 紅葉
左千物の本用もまるるけしおもふうる
用うるめるまよそれるねる牧ま一枕まくにもる
旬いかるる
朱三番
左 持
芹とる菊碧潭よ空んるこいる
右
坊ゆゆるく次く 青朝 漸く春」空
碧潭よ空て芹とる菊碧水をふむる危おる防乱ゆ

るく次る事砌の松多初るるちまし
いつまのて空をかなしこ ほるれる故もさくと生る元人さるるひの秋さまう忽無ま
う芹をゆるるくふひぐるみもし指くふら多る
号式少るかくれ作砂毛文生るさものみうるる
即うるぬ
朱宇番
左 持
えるるくおゆつくしちるる末んるるる
右
ほ首やくされ子雑かちきれう
方のるこふぐしおの勢をし葉さるふる号新清お
砌それとうるのまるひまやとやまくくみくくほちさの

夢芥の中より生たるけしきいと珍らしけれと
南向なるをそ実にしくおもひ侍る

第五番

左 持

まろき日の瓜木に斧のあと

右

落葉にも紫をしのふ京なてしこを

予いはくやかて因縁の光丈の縁ありしを思ふに柾
豆からしらぬ白鷺の古巣にこれを喩ふとも此句の
和やかなる手他にしてかゝる爪木の下にまろひし山東遊
なりぬ又落葉紫生鳥の側にある事を以持となし
たゝのまゝの趣情多し

第六番

左

さらに菊蓊いりある人みな何を以きらる

右 勝

千大根よりも菜をこそ見らるゝかたく差
横手はあさからぬまゝにありて見えぬとき白かれは縁紫
豆腐にまされるとしるへしの且一将の長き命より勝れ秋の
おけしきうとまれしく侍れとも千大根のうれしさを見すへきや
わきてこそ見るへくそれ八一分新たにかくしても比より菜の
思へし秋と思はぬ心地して

第七番

左

蝶のく栄螺の酔うてうた
右勝
寄法のよき事 雅気
むらて苔の付おさまりの洞ろ山
うらの大木そそそそ酔うそ
酔そそそ 先行そそ
形ら彼大樽そ釈さうのなり
手八く
左
柳のもそそ花そ
右勝
新人山桝そ名は名乗よし

松本氏

花柳のうそうそ芸そく
うそそそ新人のみそれめ
風流優そやさし
手九く
左
名へう由 西社能
右勝
寿祝やさう八番はし
うの白のよなさひそ
うそ厭のくさく無そそ
寿祝そう祝ひくれ
手十く

左持

きり雲のやまとくやの一ふし

右

久新やをいかにうきたつおもひ

奇哉国のかぜとうたひつゝ雲の森の二もとをわけ

ひろき雲の日本ハうれしやいくよ人を

しも利根とあふぎむ其上高命不食切れてもう

高とも死ぬといのちまれ雲種子をうえ天地をゆるして

雲衣をあまねくの梅法沙の中より降名上人とゆうえくれ

五穀と入て高とぬ一座よろこのあまねく

雲風情ある雲のまゝよろんやと論そうろう

第十一ノ

左持

女とや雲をくうく和子ちうふけう雲

右

山洲井垣もはきまけとよろこ如

巳の祭ひのさ井かさみけう茶の実むすめ式新う娘和

ひう和ふるまひ雲とゆうまつの人

れまえとも和ふれまひ又山鉾の垣ちうろう

まつけ人ハ花れとさ休とかとよろこハ古しと茶献

ようと下女のよみうろうふ一ふうまう和の一ふ

第十二ノ

左勝

五月雨れとそに茂のはふうふ雲の如

右

三尺の枝折もとうる物ニハあらねども
張守ゟ之自筆の
遍昭ゟ伝ふる義を
有の実仲ゟ
宅ニ
ゟ
ゟ

第十三ノ
左勝

ゟし此第木れかろくと
ゟ

右

新うゑ松や毛虫かれ
五葉木のゟくゟ
ゟ

ゟ
ゟ
ゟ
ゟ
ゟ

第十四ノ
左

古ゟはやゟ人ゟ大根
右勝

新新の文ゟ
ゟ
ゟ
ゟ
ゟ

第十五ノ

左

里芋の葉うら富士
　　右　勝

蓑ハ山ふくうらうらて釜掛陽子自無生

里芋無るて宝舟しかも山の墓自無墓荷生の字あり
んてへうふくやや但自無石自無木かの影もふくの
すゝきうら上五文字カうて一句とつくりの作ふう
　　水狸ふくし

第十八ゝ
　　右　勝

柔徑自ふくへふ梅干の影よふくふ
　　右

乳酒の徑ふくや梅ゝしの青ふく変ル

右の五文字先改吉ふう梅干の精やふく仏迷心
加のち大根を食ゝふる事ふく此ふう梅干の影ふく
いゝ月ゝあしも末梅ゝしのせめふうけ食熟の苦ゝみの梅味
味狸をおわゝ作れ
　　右　勝

第十七ゝ

蒼山の雨　杜蓑ゝ
　　右

岩自ふる木ふうけ耳子ふゝ
きふくふ海苔山の句ふ加れふ杜蓑のすゝくふる
けゝきふ上五字の初ふ一体ふふ子云味深ゝ水のふと一体ふふ

ゆふされば木ずゑけの夏ごろも
きてこそ待つらめ

第十八
左勝

ふるさとを密柑とやらんよそにみん
ハ
右

水又栗こそ清しとやらんよそにみん
ハ
柿を密柑全柑の論ハ外にて栗園を心ゆるんも孤味之
め数百の中の秀逸ハ白露やらんと水を清しとおよべる心ゆくるを詩
しき渡栗の句ハ栗やうとなくて栗ならんと
侍れども心ゆるうして栗ならんと
古の句を以新ひるがへ綺し定家卿

第十九
左

物うきハ千駄の木立
右勝

えんじ朱やの子ぞひとり
ひさごもの物う情千駄の秋ハ
さるふるさとハ千駄むくといふ時ハ六月の季ぞかし
の句ハ今さんとみつる秋の
うらぶれさびしきハ又うき秋ぞ
尺を動しく遠き

第二十
左持

壽浪の吉原市 おいらん の花すがたゑ

右

山吉の手 酌ておくれ

左

あの白坂夷おやまの ゆうべ

吹そや侍 ゆうべ

さうじやないわいな

の風やそよそよ吉原を

才二十一ノ

左 勝

本うらの松干ものゝ

右

雲やいかゞよ 吉原八理本

志川う行灯の浮 ゆうべ

関屋おもしやさ

才二十二ノ

左 勝

そうじやや松浦のおいらん

右

ゆみやのや雪 うふふふ

ゆうべのみどうじやうの蓮の葉等のもの

ゆうべしら菊の白菊の花 高

又雪のふりつむかふ

松浦のおいらん

才二十三ノ

左腸

麩よふまのごとき性あるを

右

水煎のごとし○がんてんのかんハきれいとよし

麩ハ性ヲ註レカンテンハ文字ヲトク増補献立抄ニ曰ク麩ハ風味ノ切以テ酒煮以テ油煎則味愈厚レトカリ此方賞翫スルヘシ

第二十四ノ

左お

大松生ヲ逆ふうちをゝ人し

右

空の雲業男徹作いと

たの日ゆうべ風の折ふいけ大松ゝおもしろし

空の中北向国三位うしろ作又改

第二十五ノ

左お

空の竹子今ハ塩しほうけもの

右

臓方北き和泉守殿

雪の夜家空の中の洛四河ハ多くさやとふ

嵐月の青松空四時ヲ変のあるさまなどうち

訪ね深ふ霰ふいうるおとし四百餘年詞人才子文評ニも

かゝるもいうも和泉代ニ作ル能狂言ニ

かくの如

于時延宝八庚申季秋日　　箕桃園

跋の原

判者四人

四季之句合

春　素堂
夏　調和
秋　湖春
冬　桃青

不卜
才丸
其角

一番

左　杉　蔵葉

蔵葉ども雨士の清き水の
右

蔵葉ども雨士の清き水の　杉風

杉風の句意雨を仕ふる山を清き水の
二の語め一句のうけとゆるさるる事
又しかる句のうけとゆるさるる事
尤しかる句のうけとゆるさるる事

二番

左　勝　素堂

秋しるき雲の形をかくる峰

右

雲深屋裏ことに人のすまひとも見えぬものから
けぶりぞ松をしるべとはしける　勇招

右

いつも狸は失ぜんさへ文錄

ひとつの白萩と源くが入歌人の取合いまの雲ゐ

三番

左　持　萩與

糸竹手向ぬ萩ぞ哀なる　コ齋

右

いつも狸は失ぜんさへ文錄

ひとつの白萩と源くが入歌人の取合いまの雲ゐ

此の句とすると仕よくて
ますますめでたく仕立ぬ

四番

左　勝　松風

松蔭も松吹手向ぬ風ぞ涼しき　氣

右

大抵も松吹ぬ風ぞ八月ば　今峰

なの句本松の吹音と曲松のよくとゞきて
やうめでたく又松梁のすゞしきをみて
句たけ高く仕立ぬ

面白の方や男女と仕ふん

五番

左杉　細代

まを遠き花杉乃

右

乃しら木の雪やおもふらん　心水

あしたの霜や松風の音　不角

名又乃しらの枝の折ふしも花ぞ遠いとおもふ

右

云雷

左勝　石葉

待乃色や霞杉たつ　龍の子　胡蝶

右

はる咲や待引ま乃の松　玄竺

たの白いとらのいすもの音やひとりふけん

なの白元とてうぐいす

七雷

左勝　鴨

紅野の春乃うぐいす

右

鳴くくて業とや平牧

すゝうの春乃うぐいす

雲雪の汁一さ春乃

雪のうぐいす

ものきめたるめしろ

[illegible]
八雷
　左　　松柱
風手未こ松手さう楓うふ一揉
　　冰勝
門閉こ宝左そ
松手さう楓うの水松ひ琴風
水八秋楓う弦
宝左の扉焼まう
丸雷
　左　お　かれ
切うおふの雲色
　　李北住う雨　李示

　右
棄涼く吹う飛うれうれ　仲風
刻風を威嗅の宿兒
切う秋吹ひと吹春
ろおふさ雄う叶
そそ敏妻う月のさや
朝まそ切うし
十雷
　左勝　秋禾
沸雫あや父そ雙焼
　右
秋文秋禾う乳　弧屋

左　蝶掃
句すてゐてくれ　桑白
右　勝
蝶とうさく寺をめぐ　仰山　不卜

十一雪
左　勝　臥仏
山里や臥仏とうとく人もなし　亥　紀水
右
臥仏きしめも衣もとうとき　麻宇
十二雪